Backcasting と Forecasting

関西大学　社会安全研究センター　小澤　守

先ごろ，勤務する大学で文科省の外郭組織であるJSTの「共創の場形成支援プログラム」に2年程度かけて組み上げてきたプロジェクトを申請したが，残念ながら書面審査段階で不採択に終わった．このプロジェクトは大学と地域の自治体，企業などとの連携のもとに企画したものであったが，プログラムにうたう「バックキャストによるイノベーションに資する研究開発*」要素，平たく言えばものつくり的側面が希薄と判断されたのだろう．それも当然で，安全な街づくりと経済発展を掛け合わせた実は壮大な内容で，逆に言えば話が大きすぎたのではないかとも思っている．

「共創の場形成支援」では，将来の「ありたい姿」を想定し，そこからのバックキャスト（Backcasting）でプロジェクトを企画する，即ちありたい姿に近づけるためのロードマップを作ることが要求された．基本的には大学と自治体，企業などとの共同作業で新たな枠組みを構築し，それを社会に実装させることが主目的となっている．対義がフォアキャスト（Forecasting）で，これは辞書などによれば現状のものを積み上げ，ありたい姿に近づけることとある．両者ともありたい姿を想定するのは同じであり，利用可能な手だてとしては周囲も含めて現状で我々が持っているものしかないのも事実である．いずれにしても一昨日，昨日，そして今日の今迄の活動から逃れることはできないのである．また一段階進めばまた新たな展望が開け，ありたい姿に向けて必要な手だてもでてくるのは当然だ．となれば，あえてBackcastingとForecastingと区別する必要があるのだろうか．申請に当たって文科省の説明と具体的な成果が求められるJSTの説明とには齟齬があり，両者が混乱していたように思う．

ところで，SDGsやWell-beingなど欧米における標語作りのうまさには舌を巻く．Well-beingなどは平たくHappiness，Healthということができない多様性（これをDiversityというのも同じ）を包含しているのである．また我が国においてはそのような標語の拡散の速さに驚く．ただ，言葉の本質を理解しないままに標語として使いまわすべきでない．前出のBackcasting，Forecastingについては，著者などは車のヘッドライトに見立ててハイビームとロービームと考えている．つまり視野の広がりの大きさの違いと理解するのがよいのではないか．そして夜間走行ではハイ，ローの組合せが必要となる．

制御しようとする対象からでた情報をありたい姿，つまり目標値と比較してその差分を求め，それを新たな情報として対象に印加することを，フィードバック系と称している．これは周知のPDCAサイクルと同じことであり，自動制御においてはシステムの安定性が保証されている限り，最後には適度なところに落ち着く．しかしながらパラメータのチューニング次第で一時的に行き過ぎ，目標値から逸脱することもある．その状態は我が国では「失敗」と称されマスコミ以下厳しく非難される．

明治神宮の創建を先導した渋沢栄一と，100年の森と呼ばれる林苑計画を多くの反対を押し切って進めた林学博士の本多静六たちとの話はつとに有名である．そのような，少なくとも数十年先を見越して，現状に拘泥せず新たな枠組みの構

築を目指す，ハイビームの視点が今の我が国には特に欠如しているのではないか．ありたい姿と現状との差分をいかに埋めるか，そのとき何がどう使えるかなど，昨日今日の技術や理念，お隣の考え方など広範に見渡し，可能性のある手法を取り入れ，実践してみるしかわかりようがない．その結果，新たな視野が広がり，新たな手法が見つかるかもしれない．うまくいかなかった時には世間でいう「失敗」になるが，その経験こそ大切で，新たな展開も新しい視点も生まれてくるだろう．失敗やトラブルをある程度許容できる社会でないと，結局は一歩も前に進まないことになる．そのあたりが，かつて明治政府が招いたドイツ人医師Erwin Bälzのいう我が国の問題点（『六甲展望』令和4年12月号）に該当するように思うがいかがか．

　かくいう著者に本多や渋沢のような深い洞察ができるとは思えないが．

* https://www.jst.go.jp/pf/platform/outline.html